

東京音楽大学附属民族音楽研究所刊行物リポジトリ

Title	鹿児島島の笛「天吹」における演奏・製作とその文化的背景についての記録調査の報告
Title in another language	A Fieldwork Report about the Performance, Construction and Cultural Context of the Kagoshima's <i>Tenpuku</i> Flute
Author(s)	淵上ラファエル広志 (FUCHIGAMI Rafael Hiroshi)
Citation	伝統と創造=Dento to Sozo, Vol. 12, p. 67-78
Date of issue	2022-03-30
ISSN & ISSN-L	Print edition: ISSN 2189-2350, Online edition: ISSN 2189-2482, ISSN-L 2189-2350
URL	https://tcm-minken.jp/publication/IE_B12202206.pdf

鹿児島県の笛「天吹」における演奏・製作とその文化的背景 についての記録調査の報告

A Fieldwork Report about the Performance, Construction and Cultural Context of the Kagoshima's *Tenpuku* Flute

淵上ラファエル広志 FUCHIGAMI Rafael Hiroshi

2022年度文化庁補助金事業「伝承を担うフィールドからまなび、ともに作り、地域へつなぐアートマネジメント人材育成」の実践セミナーと特別公演のため、鹿児島県地方特有の笛「天吹」における演奏活動及び楽器製作とその文化的背景についてのフィールドワークを行った。天吹に関係が非常に深い薩摩琵琶と自願流という鹿児島県地方のレガシー、この三つのそれぞれの練習会、また竹伐りレクチャー、子供向けの天吹製作講習会、各会員の演奏、伝承者と後継者へのインタビューを記録した。

キーワード：天吹 *tenpuku*、薩摩琵琶 *satsuma-biwa*、
野太刀自願流 *nodachi jigen-ryū*、
伝統音楽 *traditional music*、地域レガシー *regional legacy*

1. 鹿児島県へのフィールドワークの概要

1-1. はじめに

今回のフィールドワークは、2022年度の東京音楽大学文化庁補助金事業「伝承を担うフィールドからまなび、ともに作り、地域へつなぐアートマネジメント人材育成」の一つの事業として、鹿児島県地方特有の笛である天吹とその文化的背景についての記録調査を実施する目的である。

天吹は、江戸時代以前から武士階級の人々の嗜みとして伝わってきた。当時、薩摩藩士は、自願流という剣術を鍛錬したうえ、天吹と薩摩琵琶を情操教育として稽古していた。現在においても、鹿児島県地方の伝統文化のレガシーとして自願流・天吹・薩摩琵琶、この三つの練習に取り組む団体が存在する。

天吹の構造をみると、竹製の縦笛、手孔5個、長さは30センチ前後であるため、小型尺八のような楽器に思える。そのため、尺八の専門研究¹では、天吹は尺八の同属楽器の一つとして位置づけられることが多い。だが、天吹は全国には普及せず地域性が保たれている郷土楽器である。

天吹は、営利目的での楽器製作及び演奏が禁じられている。そのため、楽器屋や工房で天吹を購入することができない。しかも、奏者自身が自らの楽器を製作することが原則である。つまり、演奏と製作は非常に密接にかかわっており、双方の技術を知らなければ、天吹の伝承を受け継ぐことはできない。

このように、天吹の音楽活動に光をあて、そして天吹とは切り離すことができない関係にある自顕流と薩摩琵琶へのフィールドワークを行うため、天吹同好会、野太刀自顕流研修会と薩摩琵琶龍洋会、この三団体の活動への記録調査を行った。

1-2. フィールドワークの内容

本稿では、鹿児島へのフィールドワークの内容は以下にまとめる。

【期間】

- ・ 第一回：2022年11月12日～15日（4日間）
- ・ 第二回：2023年1月21日～22日（2日間）

(1) 竹伐りレクチャー第一回

日時：2022年11月12日（土）、10:00～12:00、場所：霧島市と伊佐市（竹藪）

講師：白尾國英（天吹同好会会長）、上川路直光（天吹同好会理事）

撮影：瀧上ラファエル広志

(2) 天吹オンラインフィールドワーク（インタビュー）

日時：2022年11月12日（土）、17:30～19:30、場所：始良市加治木町（Zoom 配信）

インタビュー：白尾國英（天吹同好会会長）、上川路直光（天吹同好会理事）

コーディネーター：瀧上ラファエル広志

教員：2名、受講生：8名

(3) 天吹同好会第41回記念会

日時：2022年11月13日（日）、開場 13:30 開演 14:00、場所：鹿児島県婦人会館

主催：鹿児島県指定無形文化財保持団体 天吹同好会

参加団体：天吹同好会、薩摩琵琶龍洋会

撮影：瀧上ラファエル広志

(4) 鹿児島文化史のレクチャー

日時：2022年11月14日（月）～15日（火）、場所：鹿児島市、日置市、南さつま市、南九州知覧町、出水市、薩摩川内市

講師：白尾國英

(5) 竹伐りレクチャー第二回

日時：2023年1月21日（土）、9:30～11:30、場所：霧島市横川町（竹藪）

講師：白尾國英、上川路直光、佐野雅雄（天吹同好会理事）

撮影ディレクター：姫田蘭

(6) 天吹同好会練習会

日時：2023年1月21日（土）、13:00～13:50、場所：鹿児島市共研幼稚園

参加者：白尾、上川路、赤崎、小濱、湊上、山本、亀割、吉田、湯川、佐野、寺岡、柚木（対面）。喜入、久保田（ビデオ通話）。合計：14名。

撮影ディレクター：姫田蘭

(7) 子供向けの天吹製作講習会

日時：2023年1月21日（土）、14:00～15:30、場所：鹿児島市共研幼稚園

主催：天吹同好会

講師：白尾國英、上川路直光、佐野雅雄、赤崎紳一（副会長）、柚木盛吾（理事）（5名）

参加者：幼稚園児から中学生まで（16名）、保護者及び同好会会員（10名）

撮影ディレクター：姫田蘭

(8) 野太刀自顕流練習会

日時：2023年1月21日（土）、16:00～17:00、場所：鹿児島市共研幼稚園

主催：野太刀自顕流研修会

参加者：幼稚園児から中学生までの子供：7名（4歳～11歳）、大人：7名（26歳～76歳）

撮影ディレクター：姫田蘭

(9) 薩摩琵琶龍洋会練習会及び筑前琵琶と肥後琵琶との交流会

日時：2023年1月21日（土）、18:00～20:00、場所：鹿児島市共研幼稚園

主催：薩摩琵琶龍洋会

講師：上川路直光

参加者：薩摩琵琶＝白尾、永島、亀割、宇都、寺岡。筑前琵琶＝石橋旭姫。肥後琵琶：岩下小太郎。

撮影ディレクター：姫田蘭

(10) 竹伐りレクチャー第3回

日時：2023年1月22日（日）、10:00～12:00、場所：霧島市

講師：白尾、上川路、赤崎

参加者：天吹同好会会員：湯川、宇都、吉田、湊上、原田、寺岡

撮影ディレクター：姫田蘭

(11) 天吹同好会各会員の演奏記録

日時：2023年1月22日（日）、12:00、場所：霧島市、安良神社前

曲目 / 演奏者：《テンノシヤマ》（湯川、寺岡）、《イチヤナ》（赤崎）、《シラベ》（上川路）、《センペサン》（湊上）、《アノヤマ》（白尾）、《ツクネ》（佐野）、《タカネ》（吉田）。合計7曲、8名。

撮影ディレクター：姫田蘭

(12) 伝承者及び継承者へのインタビュー

日時：2023年1月22日（日）、15:00、場所：霧島市佐野宅

インタビュー：白尾國英、上川路直光、宇都太賀（会員）、寺岡晴雄（会員）

インタビュアー：原田敬子、瀧上ラファエル広志

撮影ディレクター：姫田蘭

2. 天吹同好会における音楽活動

天吹同好会は、1981年に発足し、1990年に鹿児島県の指定無形文化財として認定された、天吹伝承を保存することを目的とする団体である。現在、会員の人数は合計 37 人である。次は、同好会にて行われる主な音楽活動について記述する。

2-1. 練習会

天吹には、家元制度のような組織がなく、運営を目的とする稽古場や道場のような場所もない。体系化された教育法はないが、1986年発行の天吹研究の集大成である『天吹』という本を教則本としても用いている。そこには、天吹曲の楽譜（五線譜と尺八譜）や奏法などについて記載されている。さらに、大田良一（1887-1959）という天吹伝承者が遺した録音が重要な資料となる。大田の録音は三つあり、第一は「NHK音のライブラリー所蔵のレコード（1953年）」、第二は「加治木町公民館所蔵の録音テープ（1955年）」、第三は「堀金義所蔵の録音テープ（1958年）」である。これらの録音は、今日でも天吹の後継者に多く用いられる教材となっている。また、天吹同好会ホームページの会員専用ページにアクセスすると、天吹の吹奏法についての動画や記事などを視聴することができる。しかし、このような教材があるにもかかわらず、実際には同好会の会長及び先輩から後輩へ、天吹の奏法や製作、また伝説や精神などを直接口伝えで伝授することが多い。



写真1：2022年1月21日、天吹同好会の練習会

練習会は、毎週木曜日 17:30 から 19:00 まで、鹿児島市共研幼稚園にて、同好会会長の指導の下で、一般会員の練習会が行われる。2020年以降、コロナウイルスが流行してから、練習会はビデオ会議 Zoom で行われるようになった。パソコン画面を通しての練習会にはデメリットもあったが、一方で、オンラインになることによって、現地から遠い遠隔地に住む会員も、練習に参加できるようになったというポジティブな側面もあった。これに乗じて、さらに 2023 年から対面と同時にビデオ会議でのハイブリッドな練習形式を実施することになった。

練習の内容は次に述べる。まず冒頭で、ロングトーンを 10 分程度吹く、基礎練習を行う。

その後、一人ずつ順番に一曲を吹いていき、同好会会長から指導を受ける。吹奏を聴き合う中で他の会員と助言を交換することもある。指導の内容は楽器の構え方、呼吸方法、音程、フレーズの流れ等について言及されることが多い。最後に、全員で《テンノシヤマ》、《シラベ》と《イチヤナ》の3曲を吹いて終了となる。

2-2. 子供向けの天吹製作講習会

2023年1月21日、天吹同好会の練習会の終了後に子供向けの天吹製作講習会が行われた。参加者の中には、野太刀自顕流研修会に属する子供、共研幼稚園の園児と卒園児とその保護者、また成人の同好会の新会員も見られた。

当日、製作指導の白尾、上川路、佐野、赤崎の下で、四つのグループに分かれて、道具の持ち方から丁寧な指導が行われ、一本の竹から天吹が仕上がるまでの製作体験が実施された。



写真2：佐野の指導。指孔の位置を測定する。



写真3：赤崎の指導。鋸で竹の長さを調整する。



写真4：白尾の指導。ドリルドライバーで指孔を開ける。



写真5：上川路の指導。歌口を形作る。

講習会の終了後、各参加者は自作の天吹を持ち帰る事ができ、満足げな表情を見せて達成感を顕わにしていた。このような子供の天吹製作講習会は後継者を育成するための機会になっていると言えるだろう。

2-3. 竹伐り

竹伐りでは、天吹製作用の材料である布袋竹²を採取する。布袋竹は、真竹属の一種であり、英語では Fish pole bamboo (釣り竿竹) と呼ばれている。布袋竹の原産地は華中地方だと考えられているが、日本に帰化したものが福岡県と九州南部に野生化している。鹿児島では布袋竹はコサンダケと呼ばれ、県内でその竹藪は決して珍しいものではない。だが、布袋竹の竹藪に生えているものの中でも、天吹製作に使える竹は限られているため、竹伐りは簡単な作業ではない。

竹伐りレクチャーは白尾、佐野、上川路と赤崎の4名の講師によって、以下の日程で行われた。



写真6：上川路講師による竹伐りレクチャーが映像ディレクター姫田蘭に記録されている様相

- ・第一回：2022年11月12日（白尾、上川路）
- ・第二回：2023年1月21日（白尾、上川路、佐野）
- ・第三回：2023年1月22日（白尾、上川路、佐野、赤崎）

第二回と第三回には、東京音楽大学作曲家准教授の原田敬子と映像ディレクターの姫田蘭も同行した。次節に、天吹の材料について、そして竹伐りレクチャーで得た情報をまとめる。

2-3-1. 天吹の材料について

日本の伝統的な管楽器の中には、「竹笛」という種類の楽器が多い。しかし、竹笛を製作するための材料は竹のみではない。漆、地、また象牙、籐、樺などの素材も竹と組み合わせて頻繁に使用される。竹以外の材料を用いる場合、音に影響するものとそうではないものの二種類がある。音に影響する材料の代表例が、地あり尺八の「地」である。管内に地と漆を塗ることによって、音量が大きくなり、音程や音色にも影響を及ぼしている。一方、音の質に影響が殆どない材料には、尺八や篠笛などの外側に付いている籐や樺などの巻物が挙げられる。見た目をよくするための装飾的な目的か、楽器をより丈夫にする補強、或いは、割れた楽器を修理するために用いられることもある。

しかし、上記の例とは対照的に、天吹は製作するための材料を竹しか用いない素朴な笛である。合奏しない「独奏楽器」でありながら、舞台上で演奏するための楽器ではないと捉える。そのため、竹以外の材料の使用や、音量を大きくするための技術などは不要である。しかも、その竹自体の音の味が良ければ、音程は少々不安定になっても問題はない。写真7では天吹の部分名を紹介している。

2-3-2. 竹伐りレクチャーの内容

竹伐りを実践するにあたっては、まず時期と場所を検討する必要がある。秋から冬にかけて、竹の水分量が少なくなり、締まりの良い良質な素材が採取できる。よって、10月から2月の期間が相応しい。

土壌の性質や気候によって、天吹製作に適切な竹藪と、そうではないものがある。そのため、竹を伐る前に、まず竹藪を選ぶことが最重要である。ポイントは次にまとめる。

竹材の性質に関しては、固い竹の方が響きは良いため、寒い場所で、赤土であり、川のそばや石が多い山に位置している竹藪が天吹製作用の材料を見つけるには最適である。反対に、鹿児島地方に広く分布しているシラス³と呼ばれる堆積物に生える竹は天吹には向いていない。

天吹製作に使う竹を見つけるときは、まず節の間隔と太さ（外周）を確認する。節の間隔に関しては、竹の根元に近い部分が天吹の菅尻に当たるところになり、菅尻から第一節までは指二本（約2cm）、第一節から第二節までは指四本いわゆる手一握り（約8cm）になるものが望ましい。そして、第二節から第三節までは指六本（約10cm）、第三節から歌口までは指四本となる。竹の太さに関しては、外周は約22mm前後が適切である。

竹を切断するにあたっては、注意点が三点ほどある。

一点目は、歌口にあたる場所（上部）より少々上、そして菅尻に当たる場所より少々下で切る。なぜなら、竹を長めに切っておくことで、製作時に長さの調整が容易であるからである。

二点目は、最初は竹の上部を切って、最後に下部を切るという順番を守ること。理由を説明する。撓りやすい竹を伐る際、鋸の動きによって竹が揺れてしまう。その不安定さを解消するために、右利きの人には竹の上部を左手で支える。そうすると、左手で支える場所と、



写真8：切断の順番

根茎に繋がる場所、二点の支えができ、しっかりと固定した状態で鋸を動かせる。この状態で、竹の上部を切断する。次は、また左手で竹を支えて、下部を切断する。切断を下から始めてしまうと、上部を切る時に非常に不安定で切りにくくなる。

三点目は、切断する際、竹の皮が剥けてしまうことがあるので、最後まで丁寧に切ることが

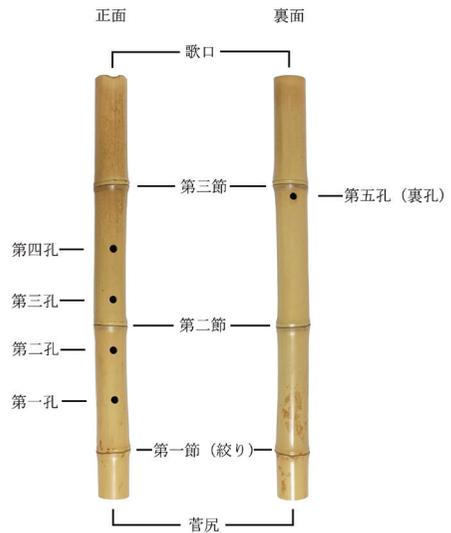


写真7：天吹の各部の名称

大切である。竹を一気に切るのではなく、半分程を過ぎた頃、完全に切断が終わる前に、一旦鋸を止め、今度は逆側から切り始めるほうが皮剥けのリスクが少なく済む。皮が剥けてしまうと、見た目が悪くなり、皮の剥けた部分が薄く溝になることで割れやすくなる。あるいは、その皮が欠損した部分が歌口の所に当たると、楽器自体を作れなくなってしまう可能性もある。以上に、竹伐りレクチャーで得た情報をまとめた。

3. 自頭流と薩摩琵琶の練習会

昔の薩摩藩では、独自の教育文化である「郷中教育」の中で、自頭流・天吹・薩摩琵琶の修行を実践したとされている。郷中の「郷」というのは、方限（ほうぎり）を指す用語であり、当時の薩摩藩の地域を小単位に区画した場所、いわゆる町内会のような小規模な地域であった。郷中とはその郷の青少年で構成される異年齢集団及び各成員を指す。方限ごとに独自の伝統文化や教育があり、明治になってからその教育は「学舎」という集団に受け継がれた。この学舎の流れをくんでいる教育施設が、現在天吹同好会の練習場所共研幼稚園である。当初、青少年の健全な育成を目的とし、三方限（上之園、荒田、高麗町）の郷中教育の場として創立されたものが、現在では幼稚園として存続している。

2023年1月21日、自頭流と薩摩琵琶の練習会の際、筑前琵琶奏者の石橋旭姫、肥後琵琶奏者の岩下小太郎との交流会も行った。



写真9：自頭流の練習（写真：原田敬子提供）



写真10：薩摩琵琶龍洋会の練習会と、筑前琵琶と肥後琵琶との交流会

4. 天吹オンラインフィールドワーク（インタビュー）

本事業の実践セミナーの関連企画として、白尾と上川路へインタビューを行った。セミナー受講生もビデオ会議（Zoom）で同席し、聴講質疑応答の機会を設けた。インタビューの内容は以下の通りである。

- ・天吹の構造について
 - 竹の種類や特徴
 - 歌口の形作り（洞簫型）や節や菅尻の特徴
 - 音階

- ・天吹製作について
 - 奏者自身が製作する原則
 - 竹伐り
 - 製作用の道具
- ・天吹の歴史について
 - 天吹という言葉の語源
 - 郷中教育
 - 天吹と自顕流と薩摩琵琶との関係性
 - 関ヶ原の戦いに登場した北原掃部助の伝説
 - 最古の天吹の紹介
 - 明治時代と学舎という教育団体
 - 伝承者大田良一のレガシー
- ・天吹同好会について
 - 創立者の白尾國利（1920-2006）
 - 天吹同好会の音楽活動
 - 今後の希望など

インタビューの中で、天吹曲《イチヤナ》、《シラベ》、《テンノシヤマ》、《ツツネ》、《アノヤマ》が演奏された。最後に、受講生から、なぜ天吹は人の前で吹く楽器ではないのかという質問があった。それに対して、天吹は自己鍛練のために練習するものであり、演奏・楽器製作による利益や承認要求のように利己的な欲深い気持ちを向けてはならないという戒めがあることが白尾によって語られた。このように、インタビューでは、天吹の構造や製作などのような具体的な情報だけでなく、天吹における伝説や精神についても学ぶことができた。

5. まとめ

今回のフィールドワークでは、2022年度の東京音楽大学文化庁補助金事業の一つの事業として、鹿児島地方特有の笛である天吹とその文化的背景についての記録調査を実施した。

現在、天吹に触れることのできる機会のごく限定的であり、その実践者は非常に少人数であるため、天吹の音楽文化を受け継ぐ人材を育成していくことが課題である。

天吹を学ぶにあたっては、音楽そのものだけではなく、鹿児島島の文化の一つとして、天吹の歴史、伝説、精神性等、また自顕流と薩摩琵琶との関係性も学ばなければならないと捉えられている。そのため、天吹の実践者の中には、当初は自顕流或いは琵琶の学習から入った人々も少なくはない。或いは、天吹の構造に類似点が多く、国内外に普及している尺八への関心から幅を広げ天吹に興味を持つものもいる。

天吹を実践するにあたっては、演奏、製作、両方の道を同時に究めることが不可欠である。通常、天吹同好会の会員は単独で竹伐りに出かけるが、同好会の中で新会員や後輩へ天吹の製作方法等を伝えるために、集団で竹藪に入ることもある。天吹には、家元制度や体系

化された教育はなく、日常生活の中で天吹を吹き、その吹奏を通して自己に向き合う。そして、同好会の会員たちが集い、一緒に練習に取り組む中で、その伝承を受け継ぐことになる。



写真11:竹伐りの記念写真。左から(立):寺岡、原田、宇都、上川路、佐野、淵上、(座):湯川、赤崎、吉田、白尾

【付録】

天吹同好会 41周年記念誌に掲載された筆者自身の天吹製作と演奏の経験を以下に載せる(淵上 2022: 19-20)。

天吹製作の楽しみ

私は天吹に出会うまでは、楽器を作ったことがありませんでした。演奏家としては、尺八は何本か使いますが、すべて製管師から購入したものです。2016年の鹿児島訪問時、上川路氏から頂いた天吹を大切に吹いて参りましたが、自分で天吹を作ろうとは思いませんでした。しかし、毎日練習するようになってから、その竹は水分を吸収したり乾燥したりすることによって、菅尻の少し上から歌口までパキッと大きなヒビが入ってしまったのです。その時は大変驚き、大切にしておりました天吹ですので、胸を締め付けられるような気持ちになりました。しかも、天吹自体は楽器屋で購入するものではないので、今持っているものが壊れると吹奏の機会が完全になくなってしまいうだろうと本当に心配でした。

幸い、このヒビによる音への大きな影響はなく済み、これ以上管が割れないように糸を巻き応急処置を施しました。しかし、自分としてはあまり納得がいかず、落ち着きませんでした。この経験で大事なことがわかりました。天吹の演奏だけではなく、製作も知らなければ、伝承を受け継いでいくことはできません。この大切さを痛感したことで、製作にもチャレンジしてみようと思うようになりました。

その後、2021年、白尾先生、藤原氏、佐野氏、上川路氏と共に竹伐りへの同行の機会を頂きました。先生方に貴重なご指導を頂きながら、竹の採取から音出しまでの製作過程を学びました。とても興味深く楽しい時間でした。その時に、製作の練習用の竹を何本か頂戴し、帰宅後、初めて自分一人での製作に挑戦しました。

最初は道具の使い方や指孔の位置の決定などが困難でした。資料の『天吹』に記述されている製作法を参考にしながら、取り組みました。歌口の形作りと音程の調整も難しく感じました。天吹界では有名な話ですが、何本もの失敗を繰り返しながら、どうにか演奏ができる笛を作れるようになります。私も例にもれず、その通りの道をたどることになりました。しかし、竹を切り、試行錯誤しながらも指孔を開け、また歌口を削り・・・そのようにして自分で苦心して作り上げた天吹の最初の一音を出した時の、達成感と楽器への愛着は特別なものがあります。また、製作に挑戦することによってもう一つの楽しみを見出すことができました。

尺八をはじめ殆どの楽器では、レパートリーを増やすことが当然のことです。一本の楽器で何百何千曲を演奏することを目指して毎日練習に取り組みます。それに対して、天吹では演奏曲が限定されていますので、曲数が増えることはありません。その代わり、自分で楽器を製作するので、楽器の数を増やしていくことができます。同じ曲を様々な竹で吹き味わうことができる、そのことこそが天吹の醍醐味だと感じます。

他の楽器しか経験したことのない人にとって天吹のレパートリーは「たったの7曲」と思えるかもしれませんが、数少ない曲を何度も何度も繰り返すことで新たな発見がありました。例えば、《テンノシヤマ》、この一曲を何本かの天吹で吹いてみたら、一本一本の音程、音色、音量、吹き方などがそれぞれの出す味の違いははっきりとわかるでしょう。つまり、音楽そのものだけではなく、「竹の音を味わえる楽器」それが天吹なのです。これからも天吹を作り続け、吹奏、製作共に研鑽を積んで参ります。

注：

- 1 田辺 (1947: 154-164)、上参郷 (1971: 7-16)、月溪 (1975: 13)、Lee (1983, 2006)。
- 2 学名：Phyllostachys Aurea.
- 3 始良カルデラの噴出物。

参考文献：

Fuchigami, Rafael H.

- 2017 As tradições da flauta tenpuku: herança da cultura de Satsuma. Anppom 27, 1-8.
 2021 The Mysterious Tenpuku Flute: Cultural Heritage of Kagoshima. Bamboo. (European Shakuhachi Society). Autumn/Winter 2021, 20-25.

瀬上, ラファエル広志.

- 2022 天吹製作の楽しみ. 天吹同好会第41周年記念誌. (鹿児島: 天吹同好会).

上参郷, 祐康.

- 1971 邦楽大系4—箏曲・尺八二. 岸辺茂雄 編『尺八の歴史』(筑摩書房・日本ビクター VP3012/VP3013). 7-16.
 1974 吹禅—竹保流にみる普及尺八の系譜. 『天吹楽略史—吹禅の理解のために』(日本コロムビア KX-7001-3). 9-22.
 1995 糸竹初心集. (東京: 私家版).

久保, けんお.

1960 南日本民謡曲集. (東京: 音楽之友社).

西山, 秀利.

1986 天吹の音響学的研究. 天吹. 41.

白尾, 國利.

1967 薩摩の天吹について. さんぎし. 3月号~12月号.

1968 薩摩の天吹について. さんぎし. 1月号~10月号.

1969 天吹について. 日本・東洋音楽論考: 創立三十周年記念 (東洋音楽学会 編). (東京: 音楽之友社). 153-170.

1975 天吹. 季刊邦楽. 5, 20-23.

1975 薩摩の天吹について. 都山楽報. 615号~620号.

1986 天吹の伝承. 天吹. 173.

田辺, 尚雄.

1947 笛その芸術と科学. (東京: わんや書店).

1964 日本の楽器 — 日本楽器事典. (東京: 創思社).

天吹同好会 (編).

1986 天吹. (鹿児島: 天吹同好会事務局).

月溪, 恒子.

1975 尺八の種類と歴史. 季刊邦楽. 5, 13-19.

1984 しゃくはち尺八. 邦楽百科辞典 (浅香淳 編). (東京: 音楽之友社). 491-493.

1986 天吹の音楽学的研究. 天吹. 1-42.

2000 尺八古典本曲の研究. (東京: 出版芸術社).

2008 天吹の伝承. 日本の伝統芸能講座—音楽 (国立劇場 編). (東京: 淡交社). 384-411.

2015 日本音楽との出会い — 日本音楽の歴史と理論. (東京: 東京堂出版).

上野, 堅實.

2002 尺八の歴史. (東京: 出版芸術社).

This fieldwork is a part of the Tokyo College of Music - Arts Management Project, sponsored by the Agency for Cultural Affairs, Government of Japan: Arts management personnel development to learn from the field of traditions for creation and inter-regional collaborations. This report presents the details of my fieldwork focusing the performance and instrument-making of the *tenpuku* flute, typical of the Kagoshima Region.

In addition, this report records the cultural activities related to the *tenpuku* flute which is a part of legacies in Kagoshima's culture and history, such as the *jigen-ryū* martial arts and the *satsuma-biwa* stringed instrument. In this fieldwork, audio-visual records were made on training sessions (*renshū-kai*), lectures on bamboo harvesting, and workshops on *tenpuku* instrument-making, as well as the performance of traditional tunes and interviews with the practitioners of this art.

(本学付属民族音楽研究所研究員、尺八研究)